週刊新聞

直言

SOCIALISM ── ソーシアリズム ── 社會主義

社會主義は土地、資本、其他あらゆる生産機關の公有を主張する者なり

直言は日本社會主義の中央機關紙也!!!

(平民社電話 本局三二六二番)

●新神聖同盟

日露戰爭後に於ける世界的の趨勢の一として、吾人が神聖同盟の再現を想像するは豈に必ずしも無稽なりと言はんや、吾人は日露戰爭の結了に依て二個の事實を承認せざるべからず、(一)日本に於ける帝國主義の勢力と、(二)露西亞に於ける社會主義の成功と即ち是也、

十九世紀の初年、ナポレオン滅亡後に於ける國際的競爭は歐洲四五の大國の間に演せられ、其の區域も印度以西に限られしが、百年後の今日に及びてや、活劇の舞臺は支那を中心として亞細亞大洲の全局に蔓延し、其の競爭者としては歐洲大國の外に、北米合衆國なる巨漢の跋扈と、更に日露戰爭の結果として、日本なる一東洋帝國も亦た當に加入すべき機運に到着せり、百年前に於て歐洲の地圖が所謂數大國の協議に依て勝手に切り盛りせられしが如く、今後亞細亞の地圖は新強諸國の協議に依て自由に離合塗抹せられんとす、然れ共彼等の協議なるものは元と正理と公義とに據るに非ずして、一に私利滿足の尺度に基くが故に、協議の裏面は即ち陰險奸譎詐僞權謀、凡て人類の醜辱を暴露するに非ざるは無く、軍隊軍艦は則ち彼等が最後の威嚇方法たり、「戰勝國民」は決して平和を希望すべからず、汝等の前途は歩一歩峻坂なり、現に日英同盟の擴張なるものは、盛に朝野政治家に依て讃美謳歌せられつゝあるに非ずや、若し日露戰爭に依て尤も大なる利益を得たるものは何ぞと問はゞ、皆な一齊に「英國の帝國主義」なりと答へん、世界が滿洲曠野の殺戮を遠望して餘念なきの時、英國は悠々として西藏を取れり、日英同盟の擴張とは支那に於ける對露同盟を引き延ばして、印度に於ける對露同盟を結ばんと欲する也、日本の帝國主義者は日英同盟を以て無上の光榮となす、彼等は日英同盟の擴張を以て光榮の擴張と意思するもの丶如し、吾人は斷じて其故を知らざる也、

然れ共此の如く世界強大國が東洋の關天地に於て利益の競爭に嫉妬排擠是れ日も足らざらんとするの時、彼等は顧みて各自の背後に萬國共通の大敵あることを發見せん、社會民主々義の著大なる發達即ち是れ也、吾人は露西亞に於ける社會民主々義の將來に就て細密の豫言を爲すこと能はずと雖も、而かも今日に於て既に露國改革黨の中心たることは疑ふべからざるの事實たり、吾人は露國の君主政治が一朝にして消散すべきことを思ふ能はず、吾人は露國に於ける社會民主黨の理想が忽然成立し得べきことを思ふ能はず、近き將來に於ける露國皇帝の改革事業なるものは、到底優柔不斷なる姑息の方策以上に出づる能はざること、何人も皆な推測するに苦まざる所、而して是れが爲めに社會民主黨の勢力が曾て削減せらるるものに非ずして、露國皇室と貴族と地主と資本家とに取て、片時も安心すべからざる「恐怖」たること益々甚しきを加ふるや必せりと云ふべし、何故に社會民主黨は彼等に取て爾かく恐ろしきや、軍艦は彼等に無し、彈藥は彼等に無し、彼等に人生社會の恢復に關する理想と勇氣と忍耐とあるのみ、而して壓制虐待せられて尚ほ之を怪しむことを知らざりし農民、職工、貧民等の一般社會が、此の福音に接して自覺發憤すること、是れ特權階級の種族に取て其の私利と相容れざるの「恐怖」たる也、故に罪は「恐怖せしむる」者に在るに非ずして、「恐怖する」者に在り、皇權神授説は露國々教と結托せる露國壓制の中堅たり、而して社會民主々義は皇權神授説の如き迷信的獨斷と斷じて調和すること能はざる也、然れ共此の衝突は「野蠻」なる露西亞の特産に非る也、帝國主義の膨脹する所には、其の政體の如何に拘らず、此の衝突は共に漸く劇甚なるべければ也、若し今日の問題は政體の如き小形式に在るに非ずして、人民の幸福安寧てふ生活の實質に在り、而して露國に於ける革命の成効は直に獨佛英奧伊等萬國に亘れる反帝國主義者を刺激して、其の共同運動を督促す、是れ豈に各國權威者の得て堪ゆる所ならんや、

十九世紀初年に於て各國人民革命的意氣の旺盛なるや、時の露國皇帝は神聖同盟を主張して英佛普墺の主權者と結托し、主として佛國に於ける民主々義の活動を鎮壓し、並せて各國に於ける革命の機運を共同迫害せんことを企てたり、歐洲の立憲政治が碧血の裡より僅に産出されし所以のものは、實に神聖同盟の暴戻なる抵抗の結果也、

時は變れり、世は移れり、然り封建的貴族の時代は去りて產業的貴族の時代は來れり、產業的貴族政治に取て當面の仇敵は則ち今日の社會主義となり、社會主義は人類の幸福を目的となす、世界の政權が之を敵視するは人民の爲めに非ずして產業的貴族の爲めなることを知らざるべからず、思ふに今後萬國の產業的貴族が露國社會黨の動靜に注目して一喜一憂すること、宛然十九世紀初年の各國王侯が佛國民主黨の動靜に於けるが如きものあらん、彼等豈に袖手して社會黨の膨脹を默視することあるべけんや、日本の識者は安然として曰く、民主々義の本尊北米合衆國の在るありと、愚なる哉、北米合衆國の政權は產業的貴族の黨中に在り、彼女は最早や民主々義の天使に非る也、

△平生はイツも甚しい、汚い着物ばかり着て居りながら、たまの外出の時ばかり綺羅を飾つて行くのは、丁度一方に多數の貧乏人を拵へて、一方に少數の金持を置くのと同じ樣な譯ではあるまいか(彦)

●木下尙江氏の遊説

▲關西遊説 紀州田邊の同志毛利柴菴氏、其の主管せる牟婁新報に於て縣知事清棲某の惡を論じ、爲に告發せられて一裁判事件を起せり、木下氏乃ち此の同志の難に赴かんことを約し、來る十七日を以て東京を出發し、往復の途上、兼ねて到る處に遊説傳道を試みんと欲す、其の日割豫定凡そ左の如し

△十七日 夕東京出發 △十八日 大阪着
△十九日 紀州田邊着 △二十日 公判當日
△廿一日 和歌山市 △廿二日 大阪市
△廿三日 神戸市 △其他未定

▲東北遊説 木下氏關西より歸らば程なく又東北に向つて出發すべし、其の日割豫定凡そ左の如し

△八月一日 東京出發 △二日 山形市
△四日 鶴岡町 △七日 福島市
△十日 仙臺市 △其他未定

THE CHOKUGEN.
SOLE ORGAN OF JAPANESE SOCIALISTS.
Issued every Sunday.
Communications addressed to the Heiminsha, Tokyo.
Vol. II. Tokyo, July 16th, 1905. No. 24.

ANOTHER STRIKE.

Some three hundred labourers of a paper manufactory in the province of [illegible] ... strike. The manufactory had suspended [illegible] ... weeks, owing to the inundation of the river [illegible] ... during the rainy season, and had not paid [illegible] ... days. The labourers claimed [illegible] ... The manager refused it. [illegible] ... of the 6th inst. The labourers [illegible] ... before the gate of the factory [illegible] ... at once withdrew from [illegible] ... assembled on the day [illegible] ... shouting among the [illegible] ... "Dismiss the manager," [illegible] ... the factory. [illegible]

On the [illegible] ... had been tried to [illegible] ... of the manager went to [illegible] ... office of the factory [illegible] ... did not persuade the head [illegible] ... at once resign the [illegible] ... We [illegible]

STRIKES IN SCHOOLS.

It [illegible] ... schools that the student [illegible] ... with the [illegible] ... or his instructors.

The educational authorities [illegible] ... how to stop it. Generally the [illegible] ... threatens some of the [illegible] ... terminated as the rest [illegible] ... strike. The Authorities [illegible] ... strike dismiss from the school [illegible] ... dent or the instructors are [illegible] ... punishment of his [illegible] ... course. Were these [illegible] ... will of majority there [illegible] ... demonstrations of the [illegible] ... the sign of the democratic [illegible]

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本之新聞

○聖代太平の象

臨時議會の召集は沙汰止となり、外債三億圓募集の件は緊急勅令を以て發布せられたり、議會あれども無きが如し、眞に是れ聖代太平の象なるかな、而して其の募債の條件を問へば則ち左の如し

△擔保は煙草專賣の二番抵當

△利子は四分半なれども、賣收九十磅にして額面百磅なるが故に實際の利子は五分五厘の高利となる

△而して此上に[illegible]若干の[illegible]となれば[illegible]を差引きて手取金額とする時は、眞の利子は恐らく年六分に當るべし

△[illegible]は新聞[illegible]の通り

此の[illegible]を以てし、此の高利を以てし、而して御用新聞紙は叫んで曰く、外債好景氣！と、而して無邪氣なる人は相歡して曰く、日本の國威揚れり！と、嗚呼眞に是れ聖代太平の象なる乎

○産業合同の氣運

資本の合同、會社の合同は、既に屢々記したる如く、日本の經濟社會に於ける近來の大勢なり、之を内にしては同業者の競爭より生ずる種々の弊害と多大の冗費とに堪へず、之を外にしては外國の大資本と對抗するに堪へず、内外兩面の必要に迫られたる結果、やゝ先見ある當事者は一日も早く合同の成らんことを希望し、澁澤氏の如きも亦た切に之を勸告し、最近に至りて其の運更に大いに動けるものあり、只だ眼前の小利害に妨げられて一時行悩みの姿あるのみ、今大合同の計畫ある諸産業を列擧すれば左の如し

△紡績會社　尾張、三重、名古屋、桑名、津島、知多、一の宮の九紡績は今春來合同の協議中なり、中にも三重、尾張、名古屋の三會社は既に契約に於て合同を確定したり

△製紙會社　日本、札幌、朝日の三會社合同の議あり（但し一時不調となり居れり）

△石油トラスト　寶田石油を始め、石油業者は大トラストを組織せんとて目下計畫中なり

△石炭トラスト　石狩炭礦の持主等は來る廿日頃主

（合同方法を協議する筈）

然れども日本の産業界は猶ほ未だ小資分立の時代に在り

△明治卅六年末現在の會社數は（銀行を除く）九千二百十八にして其の資本額十二億九千三百十一萬餘圓なり

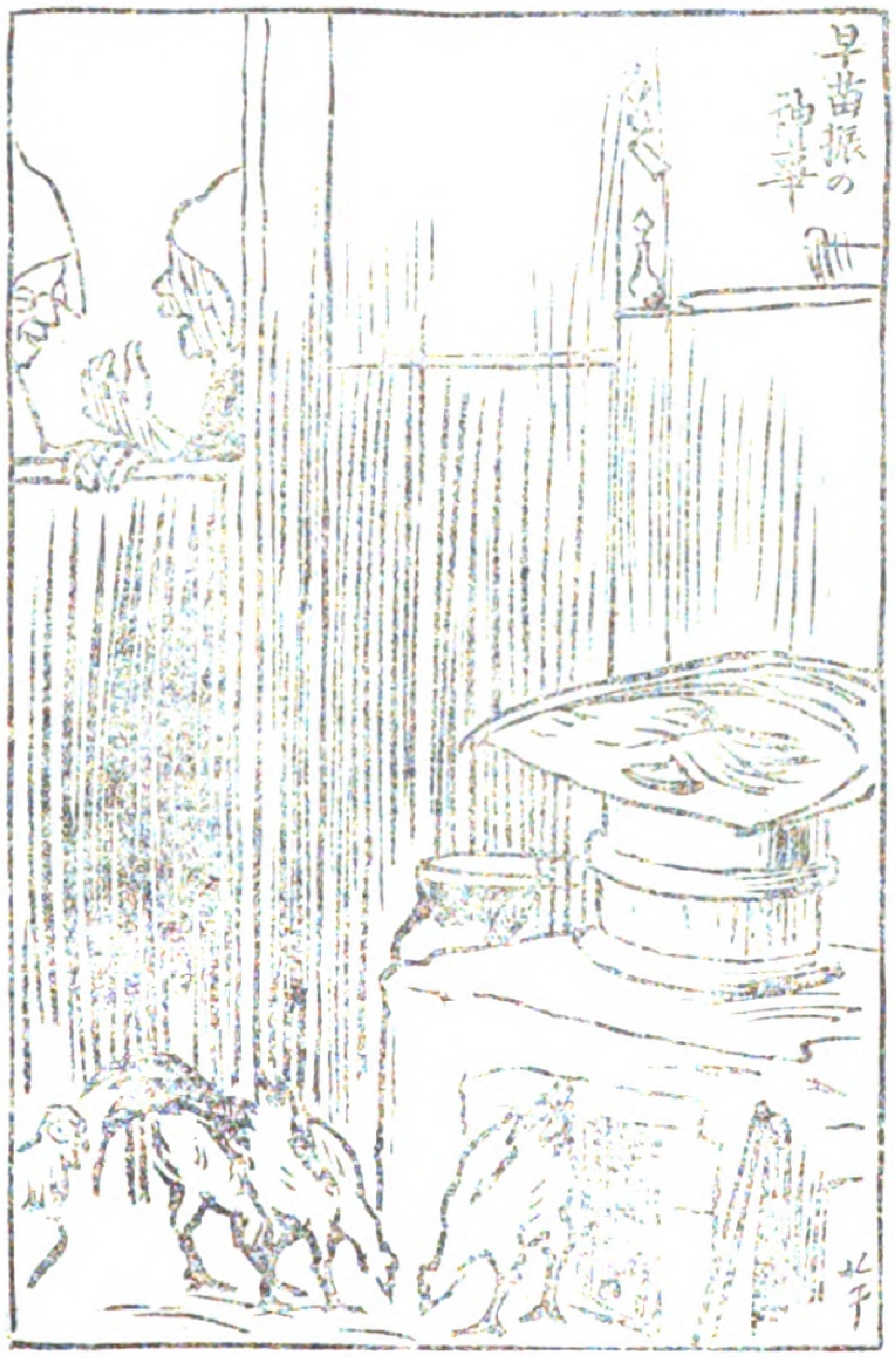
△之を細別すれば多からずと雖も、會社數の甚だ多きは小資分立の時代なり

△今試に資本額にて區別すれば百萬圓以上十二、五十萬圓以下のもの千八十三、一萬圓以上のもの二千八百廿六、一萬圓以下のもの三千三百五十六と云ふに非ずや

故に日本の中産者、猶ほ未だ切實に大資本の壓力を感ぜずと雖も、此の狀況豈に能く何時までか持續せんや、大勢を察する者は、五年十年二十年の後、日本の經濟界か全然一變して別樣の觀を爲すを知るべき也、富豪政治を歡迎せん乎、社會主義を歡迎せん乎、日本人民は今や既に二者其一を選ばざる可らざるの地位に立てり

○一先不敬の記事、發賣禁止

平民社にて取扱販賣を爲せし『荒村遺稿』は社會の安寧秩序を害するを以て去十一日發賣頒布を禁止せられ、熊本五十六部を沒收せられたり、吾人は其の何故たるを知らずと雖も、想ふに『國賊としての君が代を評す』の一文或は此の災ひを招きしならんか、それは兎もあれ、吾人は今更に日本政府の下に於ける言論出版の不自由を感ぜざるを得ず、新聞紙は道に行政權を以て發行禁止を命ずるを得ず、假りに之を差押へ置きて裁判所に告發せざる可らざるが故に、新聞記者はとにかく法廷に於て政府と論爭するの權利を有すれども、書籍の發行に至りては、其の活殺の權、一に内務行政官吏の掌中に在り、大學者の學說發表も、大思想家の信念告白も、悉く俗吏の判斷に依りて其の生死を決せざるを得ず、是れ豈に堪へ得べき事なるか、而も日本人民は斯くの如き横暴なる權力を行政官吏の手に委して、亦た恐るゝ所なきが如し、其の無神經なること眞に驚くに堪へたり、憲法は言論出版の自由を人民に與へ、警察は之を奪ふ、憲法の上に警察ありとは眞に至言と謂ふべし



○中部製紙工場の同盟罷工　王子製紙會社の中部工場は靜岡縣[illegible]江の濱に在り、吾人は其の同盟罷工に關して左の通信に接せり

△三百餘人、天龍川に臨める[illegible]は[illegible]の如く[illegible]し、[illegible]製紙[illegible]十餘日の停休をなし、停休中は給料の一分[illegible]職工等は連名して[illegible]不都合なる[illegible]中村太郎之を拒絶し受けざりしかば、職工全部の一大同盟罷工は[illegible]として起れり、七月五日夜十時[illegible]全職工は工場門前に駈け集り[illegible]一齊の[illegible]夜[illegible]工は直に[illegible]停止して門前に[illegible]に三百餘十人の[illegible]一隊をなし[illegible]取りたり[illegible]調停[illegible]の不[illegible]勢に叫んで曰く[illegible]料を與へよ[illegible]倶樂部に集りて[illegible]て協議中なり（六日午前報）

△同日[illegible]知[illegible]口入となり、工場長に[illegible]職工の[illegible]條件を[illegible]せざる時は直ちに[illegible]すべしと約し、職工一同は同日午後九時より[illegible]同盟罷工は一先づ是にて落着したり、猶は[illegible]（七日午前報）

吾人は職工諸氏の境遇に同情し、深く其の意氣の壯なるに感ぜざるを得ず、然れども一回の同盟罷工を以て單に一回の勝敗の爲と思ふこと勿れ、是れ實に他日の大戰爭に對する勞働者團結の訓練なり、諸君願はくば熟考せよ

○大阪[illegible]

[illegible]の中[illegible]休校[illegible]近來諸處に[illegible]とを見ること[illegible]多し、[illegible]一例

△大阪[illegible]校[illegible]不満な[illegible]校長の[illegible]試驗中[illegible]日下の[illegible]にて退出したり

權力を以て[illegible]の意志を壓迫する處には必ず、同盟[illegible]の不威運動を生せざるを得ず、是れ當然の結果也、近時の學校騷動を罪して其の眞因を知らず、其救治策を知らざるその、民主思想の潮流に就て一考する所あらば始て合點するを得べき也

○青眼白眼

△學生が墮落したからと云ふて、[illegible]小說に[illegible]ける、[illegible]が[illegible]と云ふて、新聞記者[illegible]を[illegible]に持って行く、今に[illegible]つて[illegible]飼が狼[illegible]な[illegible]へる時代が[illegible]

△所謂貴夫人が戰地に[illegible]つた[illegible]には、如何はしい[illegible]の[illegible]に[illegible]あつたと云ふ事△[illegible]の[illegible]で[illegible]に[illegible]職むれるのは[illegible]でおいて、社會主義研究を非常に[illegible]

かそこらにおおそ[illegible]た△[illegible]學生の[illegible]別した、大日本[illegible]成立なること[illegible]如し△小[illegible]川小學校の生徒、教師の[illegible]して、[illegible]なるの[illegible]と東郷大將、一番[illegible]は露西亞と答[illegible]を禁じても[illegible]の路[illegible]して[illegible]△[illegible]娶妓取締規則[illegible]の結果左の如し、曰く行くに[illegible]勿れ、曰く[illegible]に時計を見はす勿れ、曰く[illegible]勿れ、曰く[illegible]く娼妓たる勿れ曰く何、曰く[illegible]曰『[illegible]』、[illegible]さしの[illegible]校で警察令で[illegible]指[illegible]した[illegible]もあるとやら、何處も同じ[illegible]寄席[illegible]の世の中也△『大谷[illegible]八郎氏の奇特』と題して、彼が[illegible]神社合祀者の名簿を[illegible]して[illegible]新潟の[illegible]死者遺族に送つたといふ新聞記事があつた、一體その爲に幾ら金が掛つたのだらう

〇[illegible]社會主義演說會

[illegible]日[illegible]午後[illegible]時[illegible]に於て第[illegible]回演說會を開き、[illegible]に[illegible]同志の大氣焔を吐かんとす△[illegible]山口孤劍[illegible]して之を報く

チラシの[illegible]

左の四種のチラシ[illegible]の方に[illegible]を指定して御注文あれ、[illegible]に[illegible]して、實費一枚約一厘と郵税とを[illegible]、相當の枚數を[illegible]して直ちに發送いたします

△社會主義の檄　△社會主義とはドンナ者　△社會主義と女子　△社會主義の歌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世界の新聞

○北米ニユーヂアーシー社會黨大會

▶▶一國一黨の旨意に依り、社會主義勢力の聯合を可決す

北米合衆國ニユーヂアーシー州の社會黨は、五月二十日、ニユーヨーク市なるライリツク會館に於て大會を開けり。

△同大會は會長ゼー、レアツク、グラント氏に依りて開會を告げられ、ゼー、エム、レイリー氏議長に選ばる。

直ちに議事に入りて二三の決議を爲し、次で、露國社會革命黨の運動を讚美し、之に對して滿腔の同情と最上の敬禮とを表する事、並びに、諸團體、黨員、同情者をして彼等が運動資金を義捐せしむるに盡力する事の議案は、非常なる感激と大多數の贊成とを以て可決せられたり

△社會主義勢力統合の議案は、是れ此大會に於て最も注意すべき問題なり。蓋し此の事は昨年のアムステルダム大會に於ける『一國一黨』の決議の旨意に基づくものにして、本年の各國社會黨大會は多く此の旨趣を實行せんことを決議し居れり（但しニユーヨーク市社會黨大會にては之を否決せり、前號の世界の新聞欄を參照せよ）

△されば此の問題は同大會に於ても慎重に討議せられ、遂に萬國社會黨大會決議の旨趣に從ひ、從來北米に於て社會黨と社會主義勞働黨との二派に分れ來りし革命的勢力を一致結合せんことを決議したり

而して同大會に出席せし各地の代表者中より數名の委員を選任して實地調査をなし、若し實行し得べくんば速かに之を實現せしむることとなれり

△其れより黨制の改正其他二三の決議を行ひ、明年度に於ける州委員の選擧を爲して會を閉ぢ、其間に於て、紐育市ペンシルバニア、オハイオ等の各社會黨大會、並びに合衆國社會黨本部より、各々祝電を受け、全會員は歡喜を以て之を迎へられたり

○墺伊社會黨の聯合

五月廿七日、墺國キアナ市に於て、墺太利及び伊太利社會黨代表者の會合ありたり、其目的は日耳曼人種と伊太利人種との勞働者を結合せんとするに在り、又た、從來異人種間の反感情を煽動して萬國聯合を破壞し來れる狂熱的愛國心と戰ふべく相互に協力せんことを決するに在り、而して同時に大公開演說會は催され、ドクトルアドラー氏、エンリコフエリ氏、メレンボーゲン氏、ピスソラチ氏其他の大演說ありたり、夜に入りて墺、伊、両國の委員並びに墺、伊の國會議員等の會合あり、其間萬國社會黨本部並に獨逸社會黨より誠意を込めたる祝電を受けたりと云ふ、吾人は曩さに北方なる瑞典、那威、丁抹等の社會黨の聯合を耳にし、而して今又亦た南方より此の報を聞く、萬國社會黨が益々其聯合を確固にし、其交情を親密にする甚だ大に喜ぶべきなり

○獨逸に於けるジヨーレス氏の言論

去る十三日の部下諸新聞に曰く

△有名なる佛國の社會黨代議士ジヨーレス氏は、戰爭に對し列國社會黨員が任ずべき態度如何の論題を以て講演を爲す筈なりしが、獨逸政府は伯林に於て開講するを禁じたり、獨逸社會黨の機關新聞フオルワエルツは一つ書きとして其要旨を摘錄せるが右に據ればジヨーレスの口調は極めて穩和にして、獨逸に對しては最も親密なる友情を表し、又英佛協約に對しても著しく同情を示せり、而して曰く、若し吾人をして英國に對し敵對の行動に出でざるを得ざらしむる如き謀計を爲すものあらば、吾人は最後まで之に抵抗すべしと

是れ蓋しモロツコ問題に對する一の示威運動なるべしと雖ども、又た之を一面よりみれば、萬國社會黨が漸く實際問題に關して一致の運動を爲すに至ることを伺ふに足る、吾人は前々號に於て、瑞典、那威、丁抹の社會黨が一致運動を爲すことを報じ、本號に於て墺、伊、匈の社會黨が聯合運動を企てつゝあることを記す、讀者諸君、以て萬國社會黨の趨勢を察せよ。

○ワルキツク伯爵夫人の大演說

英國に於て、ワルキツク夫人が、最も熱心に社會主義の傳道を爲しつゝあることは豫て報導せし所なるが、彼女は、去る四月三日、シエフイールドなる帝國音樂堂に於て『兒童に對する國家の義務』なる題下に大演說を爲せり、此會堂に來りし人にして未だ彼女ほど人を引き着けたる者なく、豫て廣告せられし開會時刻よりも余程以前に於て會堂は四千餘人の來聽者を以て充滿し、遲刻者は門外に群をなせり、而して彼女が社會主義を愛する言論と、勞働問題に對する態度との熱烈なるは、人をして血湧き肉躍るの感あらしめたりと云ふ、彼女は常に赤塗の自動車上より社會主義を說き歩くを以て有名なるものにして、世の嘲笑に顧みもせず、之を以て主義傳道に最も良き手段なりと稱し居れりと云ふ、吾人は偏に同夫人の健鬪を祈る。

○瑞西機織工同盟大會

六箇の組合を聯合し、九千の會員を有する、機織工同盟は、キンテルツールに於て大會を開き左の諸項を決議せり

△從來の聯合組合を解散して、純然たる一の中央組合となすこと

△組合の事業に全力を注ぎ得る庶務幹事一人を選任すること

△各組合員は每年規定の額を中央部資金に醵出すること

△組合機關新聞『機織工』は組合員全體が義務として購讀すべきこと

かくて新憲法は從來の各組合毎に投票せしめ、若し此新組織にして採用せらるゝに至らば、明年一月一日より之を實施すべしといふ

○佛國巡査の同盟罷工

頃者、佛國西のリオン市に於て巡査の同盟罷工ありたり、『チヤスチース』記者曰く、豈にストライキを鎭壓すべき、法律秩序を擁護すべき職務にある彼等が、自らストライキを敢てするに至りては豈に奇なりと云ふべからずや、されど決して怪しむに足らず、彼等の社會より冷遇せらるゝ、彼等の地位の甚だ不安なる、事の此に出づるは寧ろ當然なりと言ふべしと、然り、眞に近來の痛怪事也。

○マキシム、リスボンヌ氏死す

リスボンヌ氏は有名なるパリーコムミユーンに於て奮鬪せし勇敢なる人道の戰士なりき、殊に保壘上の戰鬪に於て軍事的天才を現はしたる人なり、されど彼は其の徒刑より放免せられて以來、全く政治運動より身を退け、却てモントマートルに於て[illegible]あるコーヒー店主として、又た一の諧謔家として人に知らるゝに至れり、蓋し天才の世に遇はざるの致す所か。

○勞働者寫眞の提出

北米セントルイス市の市街鐵道會社は、今後勞働者を雇入るゝに當り、必ず其の寫眞を一枚づゝ提出せしむることと定めたり、是れ一には『ブラツクリスト』（放逐されたる勞働者の名簿なり、雇主間には此に名を署せられたる勞働者を再び雇入れざるの規約あり）を一層有功ならしめ、一には勞働者は奴隷なりてふ事實を彼等に感受せしめんことを目的とする也。

○日曜勞働禁止法案

白耳義國議會は非常なる大爭論の後、日曜勞働を禁止せんとする政府案の主要なる條項を可決したり、此の法案に依る時は、生產及び商業所に於ては一般に日曜勞働を禁止せらるゝ事となれり、但し例外あり、海陸運輸を業とする會社、農業勞働者、或る小產業家等に於ては即ち此の限に非ず。

○佛國に於ける婦人勞働者

佛國產業[illegible]家の雇傭する婦人勞働者は百八十六萬九千人あり、內百五十七萬八千人は織物製造に、一百九千人は食品製造所に、四萬五千人は化學的製造及び紙類製造に、四萬五千人は柔革製造に從事するなりと

◉東西南北より

▲猛烈なる軍隊の制裁　第十一師團[illegible]補充大隊第○中隊で、六月五日の午後七時頃、第○班付の軍曹中野字太郎なる者は、下士室の[illegible]居る補充兵二等卒太田時次が自分の上衣[illegible]をして紛失したといふので詰責しながら拔劍し、太田の頭部をブン擲つた、處が此頃の劍は皆な刄がついて居るゆゑ左頭部へ長サ七インチ深さ骨[illegible]に達する疵傷を負せた、上衣はすつかり血汐をあびてブツ倒れたのを他の補充兵が直に連れ戻つて介抱したが中々血は止まず痛みに苦しんで居る、不時診[illegible]ないから仕方なく[illegible]室へ行つて[illegible]で內密に手當して貰つたけれど、何[illegible]りそうも無いから、翌朝[illegible]診斷を受けた[illegible]が、ドウしても許されない、[illegible]にする積りである、而も何所へ訴へる事も出來ないのだ、何と吾等の身分は[illegible]ではないか、[illegible]其上軍隊は他の下士がはいて行つたのだといふ事である（[illegible]生）

▲憐れむべきは勞働者　四月廿八日夕張炭山を發し青森縣及び秋田地方の諸鑛山を巡り、目下山形縣[illegible]に於て社會主義の風を吹かして居る[illegible]、何れの地方に行きても[illegible]して居る、併し、勞働[illegible]の必要に今更の如く感じました、[illegible]の爲め鑛業勞働者の不足なるにも拘はらず、各[illegible]が早くから相談して[illegible]、役場より宿舍[illegible]、[illegible]何程なるやを知らせず、只[illegible]との間に[illegible]せられつゝあり、[illegible]ならぬ勞働者なり（[illegible]）

▲[illegible]同盟罷工　六月一日より[illegible]

[illegible]

▲仁川歌舞伎座より　混雜の[illegible]（社會主義者）

▲下谷區[illegible]ミルクホール[illegible]

[illegible]（大[illegible]）

[illegible]（樋口[illegible]）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

生產方法の變遷

ハインドマン氏原著　堺利彥譯

(六) 現今の資本家制度

自由農民の土地より分離せられたる事、封建諸侯家の覆滅、寺領の沒收、勞働者の團結を禁ずる諸法、民主的商工組合が鞏固なる資本家的會社となりし事、其他近世資本家制度の先驅たる諸事件は、今玆に一々詳說せざるべし。

兎にかく十八世紀の初より十九世紀の初に至るまで、自己使用の爲にする個人的生產は、漸々に利益を目的とする社會的生產と爲れり。而して自由民の多數は何時の間にやら其の土地を奪はれ、生產機關を失ひ、唯だ其の勞力を賣るの外なきに至れり。古來生產方法の變遷中、斯くの如く著大にして且つ急激なるもの決してあることなし。今その發展を別つて二段と爲すを得べし。

△第一段に於て、交換を目的とする社會的生產が、主に自己使用を目的とする個人的生產に代れり。此の變化に伴ひて純粹なる賃銀取階級を生じ、商業貿易の擴張を來し、地方市場廢れて國家市場、世界市場を見るに至れり。

△第二段は即ち機械時代也。此の時代に於ては、蒸氣力と機械力と化學的の諸設備とが產業界の全面を支配せり。

△第一段に於ては、生產者が自ら一生涯賃銀取たるに甘んずるに至り、第二段に於ては、生涯賃銀取たるに甘んずるのみならず、更に其の周圍なる生產分配の大機械の附錄たるを甘んずるに至る。即ち前時代に於ては、身は賃銀取なりと雖も、自ら其の機械を使用して勞働し、猶ほ幾分か獨立の人として生活せり。然るに後時代に於ては、彼は全く產業機關の奴隸となり了れり。

此の大變遷の根底を察するは、そは唯だ個人的生產を社會的生產と爲したるに係はらず、其の生產物の交換と使用とを個人的より社會的に變せざるの點にあり

△更に之を詳說すれば、十六世紀に於ける英國の勞働者は、前にも示せる如く、其の器具、其の原料、其の生產物、皆な自己の自由に屬せり。

△即ち農夫に在りては、自己の土地を所有し、自己の作れる穀物を食ひ、自己の毛を以て自己の衣服を作れり。又工人に在りては、その地方市場を目的として生產し、又多分土地をも所有せしなるべし。されば是等の農工は當時猶ほ獨立の一個人なりしなり。

△然るに、多數の勞働者が常に賃銀を取りて一主人の下に勞働する事となれば、原料も、生產物も、勞働する場所も、悉く其主人に屬せり。而して其の主人は使用の爲に貨物を製せずして、交換して利益を得んが爲に之を製す。斯くて組織の根底は一變せり。

△此に至れば、勞働者は既に一個人として勞働するに非ず、社會共同機關の一部として勞働せり。而して其の生產物は一部たりとも彼等に屬せず、全く其の主人に屬せり。彼等賃銀取は既に其の生產方法(若しくば其の處理)に關して容喙するの權利なし。彼等は又時々賃銀取を爲す者に非ず、生涯絕えず何時までも賃銀取を爲して苦役せざる可らず。

斯て舊來の諸種の階級は漸々に消滅して賃銀勞働者と生產分配機關の所有者とが二大階級として相對立するに至れり。

吾人は此に於て資本家的生產法の大暴風の中に立てり。而して其の暴風の混亂を解き、之を簡明に敍述せんとするもの即ち此著述の目的也。

△此の發展は其の迅速なると實に前古未曾有にして、資本家制度は未だ僅かに二百歲の齡を重ねたるのみなるに今や既に其の最終期に達し、更に進んで新時代に入らんとせること明瞭なり。

△抑々何物が能く人類を驅つて斯くの如く迅速の進步を爲さしめたる、他なし、是れ全く蒸氣に基きたる大機械產業の發生に依れり。

△十八世紀の中葉以後人類は其の驚くべき大機械を捕へ得たり。然れども其の大機械は未だ社會の手に依りて捕へられず、今日及び今後猶ほ暫く、資產階級に依りて捕へらるべし。

△經濟の進步は此に於て又其の殘酷を示せり。そもそも大機械產業は、勞働を輕くし、苦役を除き、アリストートルが豫言せし如く、一切の奴隸制は之に依りて廢止せらるべき筈なるに、而も其の大機械產業が却つて個人を壓伏し、家庭を破壞し、人生空前の不安を感ぜしめ、貧民窮民の大群集を以て各都市を塡充し、同時に地方田園の人口を奪ひ去り、倫敦及び英國をして食料の供給を外國に仰がしむると、猶ほ古への羅馬及び伊太利の如くならしめたり。

(七) 結論

以上生產方法の變遷を檢すること極めて簡單なりと雖も、而も吾人は之に依りて、人類が全然無意識の間に、覺束なくも一階段より一階級に向つて、進みたりと云はんよりは寧ろ追ひやられたるの跡を見るに足るべし。先づ共產制より奴隸制及私有財產制に至るの發展は全然無意識なりき。新形式に對する反抗と及其受理と、共に全く無智暗黑の中に行はれたり。

△當時の大人と雖も猶ほ且つ一時眼前の[illegible](謂はゆる實際の政策)を提案するの外なく、一人として其の周圍に進行する事實の眞相を知り、社會變遷の方式を作り得る者なかりき。

次に奴隸制廢れて封建制及び農奴制起るに及び、人間進步の道を作るものは、猶ほ其の無意識なる盲目的勢力なりき。美術、雄辯、征服、發明、あらゆる方面に於ける當代先見の偉人傑士も、遂に自己の進路を見るの明なく、大潮流の波に乘せられて、彼方此方に漂はされたりき。

△偶々渙然として將來を夢想する者なきに非ざりしも、彼れ自らも亦夢想家を以て居るが故に、敢て此の地上に在りて意識的行動を取るの力なく、亦た人をして自己に隨從せしむるの力なし。

次に農奴制亡びて個人主義が其の最高度に上りし時、其の無意識、其の盲目、其の無智、恰かも群童の暗中に戲むるゝが如く、人類は更に其の暴戾なる個人主義より資本家制度の旋渦中に投せられたり。斯くの如く經濟發展の車輪は、恰かも嫉妬の女神の如く、上下を押しなべて其の脚底に蹂躪せり。

然るに、現代の人は過去諸代の教訓の繼承者なり。生產交換の形式の爲に人類が長久の犧牲たりし結果として、吾人は今や、古人が無意識に無秩序に行動せし所のものを、意識的に、自覺的に、行進せしめ得るに至れり。多謝す古への人、吾人は彼等の見得ざりしものを見得るに至れり。

見よ、彼の階級政治の最後の大形式なる資本家制度は、既に自己の重量に堪へずして壞裂せんとし、之と同時に一般人民は、此の私有制時代の後に來るべき新組織に就て學びつゝあるに非ずや。(終)

(上段の肖像はハインドマン氏也)

倫敦に於る反響

"Laws must be sleep when a nation is [illegible] for its life." Goldwin Smith.

法律も時には眠ると云ひますから、眠る以上に戶まどひもしませうサ。去年の暮でしたらう、倫敦には名の高い霧の爲に中病人の樣な體で外出を避けて居た頃でした。一夕ウエールスの炭を焚いて西班牙の栗を燒きながらソーファの上に仆れ、『エコー』といふ桃色の新聞を眺めましたら、「日本は今方に武力の崇拜中であると見えて、社會黨の領袖は些細な事で有罪の宣告を受けた。一國存亡の戰爭中とは云ひながら、此の獨立の批評を禁ずる一事、心ある人には痛ましき感じを與へた」といふ一節が目について、余はいつしか果しなき想像の夢となり、余の栗は遂にストーヴに消化されてしまつた。

日本の事は大體こちらにも知れて居りまして、警視廳の御役人樣方が講師とやらをお雇ひなされて、そして社會主義の講義を御聽きなさらなきアならぬ程の學力で居らしやる事なども評判です。

松岡さんと延岡さんが『直言』を賣りにお出かけなさるについて、こゝで露國人の發行して居る『アングロ・ロシアン』が痛く嘲笑して居た事は既に御覽でしたらう。『エコー』はこれをも轉載して居りました。日本に於ける新婦人の勃興は何よりも目出たい事で、これが無くちやア社會の改革はとても物になりませぬ。

此程例により古本屋をあさりに往きましたら、同じく冷かしに來あはせたシルクハットの品のよい紳士が余の顏を善く見つめて握手を求め『あなたは日本人でせう、私は露人です、兄は滿洲で戰死しましたが、どうか戰後には露國の內治を善くして欲しいものです』と云つた。余は之に挨拶して『內治を善くしたいのは露國ばかりではありませぬ、遠目では分りにくいでせうが、私共にも他國のお方に申上げにくい事が澤山にありまして……憲法と仰るが、憲法の上に警察といふものが御坐いますサ……文明ですか、血を流さなきやア話しがまとまらないでせう、そして其の陋なる愛國主義が賴りと喝采さるゝのを見ますと、人は所謂動物學の範圍ですな』と答へました。

僕はカール・マークスのラインには歸しませぬが貴下等の精神と勇氣とは十分にアップレシエートします

堺利彥樣　　鬼塚鬼十郞

雜誌瞥見

▲『大日本現代史』 是には山路愛山氏が近々發行に[illegible]べきもの、『獨立評論』の廣告に出づ、廣告文に曰く「僕近頃人間は何時死ぬか知れぬものとの感じに[illegible]し、僕は[illegible]中に平生讀みたる材料を[illegible]作らんと欲したる事業を片付けんと欲し、[illegible]たり。世間に問ふは九月頃なり」と、[illegible]

▲擧國一致の反動を恐れよ(日本人)三宅雪嶺氏の文に曰く「擧國一致は外に向ひて大なる威力を發揮する所以なるも、外患既に去りて猶ほ常に擧國一致を行はんとするは難きを望むの態ならず……擧國一致の大に行はれし後、其反動として[illegible]の生ずる無きを保すべからず

△我國にて社會黨と稱するは猶ほ極めて微々たる者、全く齒牙に懸くるに足らざるが如くなれど、未だ[illegible]はれずして徐ろに勢力を積める無きにあらず、間接に言へば國民全體に現戰役より利益を收めたりとすべく、敵國の壓迫を免かれ、若くば外に向つて活動すべき範圍を擴大したるは、利の及ぶ所大にして且つ廣きも、直接に利益を占むるは資本家及び資產家と爲さゞるを得ず

△今や社會主義は猶ほ未だ一定せず、穩和なるあり急激なるあり、濫りに之を加味するの却て[illegible]を醸すの恐れなきに非ざるも、全く之を度外視すれば遂に恐るべき變を生ぜんも知るべからず……敵の來らざるを恃む勿れ、[illegible]備あるを恃めよとは、獨り兵の事にあらず」

▲流石に能く時勢を察したりと言ふ可し、而も社會主義を以て自ら『敵』となすに至る、かくては紳士たる紳士閥的の言ひ樣に非ずや、嗚呼雪嶺先生も遂に現制度(此の惡制度)の擁護者となり了せんとする乎、

▲戰勝と奢侈(姉崎正治氏) 最近の時代思潮に曰く「△平和の確實見え初めてより人は早く已に大勝の終結を豫期し、償金領地の收取を期待せんとす、この間にありて恐るべき者、不利條件の[illegible]に止まらず、又は戰後の[illegible]戰後經營の困難のみにあらず、實に奢侈の流行の如き其最に居らずんばあらず、

△近く國論を喚起して當局者をして姑息の平和に耳を傾けざらしめんとの誠意に、國民が如何に之を發表するも之を呼號するも、固よりその至當の本分たる、先づその條件、特に償金の額を定めて號呼するに至りては、外交上の失態狼狽たるは勿論措き、國民の一部に同に黃金と利益とに着目する者ある事實を天下に公表したるに等し、……平和を呼ぶ爲にも先づ黃金の多寡を平和の天使に擬せんとするが如きは、事實に國民人心の[illegible]に一念の[illegible]ある者のなすべき處なりや

△首府の大吳服店は元祿模樣の[illegible]な事業[illegible]したり、關西幾多の溫泉場は『祝捷』の浴客に充滿したり、戰後の邸宅新築を見越して木材は急騰貴しつゝあり、その他何彼と數へ來れば風潮の趨勢堅々として觀るべき者屈指に遑あらざらんとす、戰勝に勝てる國民が奢侈に流るとて今更の如く驚かるゝは餘りに遲からずや

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●佛耶兩教界の墮落

『債鬼の跋扈は如來の榮光を消滅し外國の金力は基督の精神を沒却す』

山紫樓

△問題は共に財政の上に在り

頃者佛教界並びに耶蘇教界に於て、殆んど時を同うして二箇の問題を開けり、一は東西兩本願寺提携の問題にして、他は日本基督教會獨立の問題なり、而して世界の精神界を司どるべき此の二大宗教の興廢存立に關すと稱する問題が、共に其の財政上の理由を骨子となすは甚だ奇なりといふべからずや

△東西本願寺の提携

吾人は新聞紙の報道によりて、之に關する精しき事實を聞き得たるも茲に一々掲載するの要なかるべし、只だ『教界時事』は其本文として之を社說に論じたれば、左に其一節を摘錄せん

抑々今回の所謂合同提携なるものは、かゝる眞宗其物の根本生命に關涉するに非ず、要するに貧乏なる東本願寺が苦しき時の神頼み、何とか當場の急を凌がんとする同派少壯才子連の窮策を施したるに對し多年野心綿々として功名の念湧くが如く、少しく眞宗を統一して自ら其覇を握らんとする西本願寺の當局連が甘く乘ぜられたるに過ぎずして、今後如何に推移すべきかは容易に豫想すべき限りに非ずと雖も今日の處にては東本願寺は西の保護後見に依り、多少債鬼の壓迫を輕減し、一時の姑息的休間を得るの利益ある可く、而して西本願寺は多年希望したるが如く一時の兩派を名義上に獨占するの快を見るべし」

△されば今回の事變より物に成りそふにもあらず、よし物に成りたりとて其結果は西本願寺が大なる財政上の破綻を見る迄の壽命にして、其時の至るは時時刻々迫し來るといふに至りては誠に心細き次第に非ずや

兩山の合同提携元より惡しゝといふべからず、而も其の單に財政彌縫の爲と野心功名の爲との結果なりと聞くに至りては今更に慨かはしく思はるゝなり、債鬼の跋扈と功名の煩惱には如來の榮光も何所へか消え失せたる次第なるか、かくて宗教の面目はそも何れに在りや、吾等俗人の眼にさへ醜汚に堪えず覺ゆるは眞に悲しむ可きの極なり

△日本基督教會獨立問題

基督教會獨立の可否問題は強ちに教會墮落の結果なりとのみ言ふべからず、されど其問題の骨子が外國の財力に倚賴するの可否にあるは事實にして、財政の一事が宗教上の一大問題たるに至りては吾人は宗教の權威の何れに存するかを疑はざるを得ず、『大日本』第八號に社說『內外強國の實を擧ぐべし』との題下に曰く

△所謂獨立案なる物昨年の日本基督教會大會に提出せられ、翕然として平地一大波瀾を惹き起してより贊否の聲喧々其の餘響益々大ならんとす

△教會が永く外國の財力に倚賴して自給獨立の精神を缺くことあらば、これ實に教會の耻辱なるのみならず、また日本人の耻辱なり、されば教會は大に自給獨立の精神を鼓舞し激勵し以て之が實行を期せざる可らず

△同時にまた世界主義を標榜して、天國に在りては內外人種の區別なく、同志者互に相提携し、共に人類救拯の聖業に從事せざる可からず

宗教家と雖ども衣食せざるを得ず、さては『自給獨立』の精神をも激勵せざるを得ざるものか、而も內外協同主義者たる『大日本』子すら、かく主張せざるを得ざる如く見ゆるは、以て一般基督教徒の苦心も察せらるべし、吾等俗人たる社會主義者より見れば、吾が天職を全ふすべく、他人の補助を受けたりとて、何れの屈辱にも非ざる可く、又たよし『自給獨立』したりとて、其を以て格別名譽なりとも思はれず、何れにもせよ、かゝる問題に拘泥するこそ、宗教の墮落と言はまほしけれ、されど又た、此には一の理由なくんばあらず、『大日本』子は曰く

△然れども吾人は茲に眞情を吐露して、外國宣教師諸君に望む、……諸君の內、或者は餘りに金力の名により日本人を左右せんとするが故なり、獨立自營の念強き日本人は、決して中心金權に服する者にあらず……願くは彼我互に謙讓し提携し、協心同力して勇ましく彼の賊と戰ひ、基督の光榮を顯彰せしめよ

日本の基督教徒が金力に服せざるを以て大業となすに至れる理由は明かなる可し吾等の如く平生富の獨占、富の壓制と戰ひつゝあるものには殊に同情せらるゝ也

△少しく事を社會主義に繫げ

要するに一は財政の破綻を彌縫せんが爲めに合同問題起り、他は財力の壓制を免れんが爲めに獨立問題生ず、共に問題は經濟上の事に屬す、其の平生、吾等社會主義者を一口に物質主義者として擯斥する宗教界に於て此の事あるは一奇觀なりと云ふ可らずや

想ふに此等兩教の諸名士は、假りに宗教上に於ては救ひの光明に浴し居らるゝにせよ、未だ經濟的安固を得られざる也、素より宗教家たるもの、安心は財政の困苦などに由りて動亂すべきものに非ず、されど吾等俗人よりして之を見れば、精神的救濟の聖職に從事さるゝ、宗教家諸君をして、斯くまでに物質問題に苦慮煩悶せしむるは如何にも社會が殘忍なる如く覺ゆるなり、我等は諸君が、救世の聖職にありながら、些々たる物質的境遇に左右せらるゝを見て、一度は其の墮落を憤れりと雖ども、又た吾人平生の主張より觀察して寧ろ氣の毒の感を起さゞる能はず、まことに諸君と雖ども、一日も衣食を缺くこと能はざれば、今の私有財産制度の下に於て此の苦心無きことを得ざるは當然のことと云ふ可し、されば諸君は少しく我が社會主義に聽かざるや、蓋し諸君の大患を救ふべきの道、即ち此に存せずといふ可らず、然り、諸君をして超經濟、超貧困の安樂境に居りて聖職に從事せしむる者は獨り我が社會主義に非ざるか、嗚呼思へば、何の時、何の所に、如何にして救世の福音に接する事あるべきや、淺薄なる吾等の知る所に非ず、唯唯お互に穢なき物質問題より脫出して、只管一身を如來の榮光に入れ、大能の攝理に安せしめたく思ふ也

●小品千題 智識と趣味　新渡貞吉編　定價卅五錢
現代最新の智識と、滑稽諷刺の妙味と、小品千題の中に併せ收めて、正に是れ淸暑消閑の好伴侶たり△珍釉美本、讀者子の愛玩に適す
△發行所　東京根津宮永町　平民書房
△取次所　東京有樂町三ノ一　平民社

●紳士閥飼養の文學者

孤劍生

紳士閥は土地と器械を有するのみに止まらず、教會を有し、學校を有し、新聞を有し、圖書館を有し、出版會社を有し、研究所を有し、「精神的勞働者」なる僧侶、博士、學者、文人の活殺の權其の掌手に在り、人はパンのみに活くるものに非ずと雖も、パンなくては一日も生存すること能はず、「筆はしやもじの用をなさず」と豈に風來山人の激語に止らんや、已に活きざるべからず、食はざるべからず、食ふべくは生活の保險を紳士閥に求めざるべからざるを奈何、ニューヨークに於ける富豪設立に係る二十有餘の新聞の新刊紹介に其の著書の好評を博するてふことは、米國に於ける文士が最も有力なるパンの保險を得たることを證明するものなりといふ、憫むべき哉、紳士閥に其の技倆を認識せられたる文士は永久權勢と黃金の祭壇に伏從し跪拜し、其の名譽と幸福と自由は彼等に左右せられて而して甘んぜざるべからず。

△ヂヤーンラシーヌトは十七世紀中に於けるモリエルと併稱せられたる佛の劇曲作者なり、曾て宴會に於て其の愛顧を蒙れる某貴族より其作物を冷評せられたる爲め、憂心措かず病を發せしことすらありき

△モリエルはアンジユー公爵の保護を受け、巴里第一の劇場の持主となり、終生驕奢なる生活を送れり

△チヨーサーはガントのヂヨン公爵より終身扶持を賜はり、富貴なる生活の中に逝きぬ。

△アセルトン女史は印度大守の紹介に依りて文壇に出で、彼女は文學者の理想は社會精神の外にあらざるべからずと叫び、遠回しに社會主義を痛罵して紳士閥の鼻息を伺ふに日も足らざりき

△キツプリングは偉人クルーゲルを誣罵したる賤劣なる詩を作り併呑主義膨脹主義を歌て軍人と貴族に媚び、紳士閥の援護を得て流行兒となれり

△曾呂利新左衞門が豐太閤の幇間たりしは普く人の知る所なり、寶井其角、英一蝶の如き、氣を負ひ才を恃んで奇矯豪放自ら喜びし俳人にして、紀文、奈良茂の幇間となり到る所の遊廓に彼れが酒興を助けぬ

△村田春海、加藤千蔭の如き著名の國學者にして、白木屋、大丸の吳服屋のビラを書き、料理屋のために座敷の趣好など考へて、其の生活に資せり

△龜田鵬齋、菊池五山、大窪詩佛等は、大阪の富豪住友、鴻池、平野屋などに伺候して巨額の潤頭を貪き、詩集出版費を強請し、公卿の門に出入しては一首若干の價を以て詩を鬻ぎぬ、詩人之を呼んで詩商人といふ

書肆より銀三百目を前借して終に一枚だも記きて與へざりし井原西鶴も「人の家にありたきは梅松櫻楓よりも金銀米錢ぞかし」と文學者の貧苦を痛嘆せしにあらずや、文學者が自ら清貧に安んぜざるべからずてふ言を千古の眞理とせる間、紳士閥に運命と幸福を左右せられつゝ、あるを自覺せざる也、彼の島村抱月氏に依て絕叫せられ、文壇之れに和せし「文士無妻論」の如き、如何なる程度迄文學者が紳士閥に酷虐し壓制し凌虐せられたるかを最も有力に最も明白に說明せるものに非ずや、美の神は嫉妬の神なり、家庭を營むは美神の愛寵を失ふものなりなど甘き空想の夢に醉ひて、苦き社會組織の眞相を感知せざる文學者は憫笑すべき哉、卿等其の肉體も心靈も紳士閥の娛樂に供すべき一個の財產なるを自覺せざる乎、飛鳥盡きて良弓藏り、狡兎死して走狗煮らる、文學者が紳士閥の娛樂品となり、其の作物の爲めに多少の名譽と幸福を報酬として受くる眞に一時のみ、彼等亦幇者、俳優、力士と其の末路を同うせざるを得ざる也

△ローマンチツク派の驍將バルサツクは死後其の著作の利徒は擧げて發行人の手に歸し、遺族は悲慘なる生活を送らざるを得ざるに至れり(「社會主義と智識」より摘載)

△尾崎紅葉氏等と硯友社を起し大に元祿文學を鼓吹したる樗山人は原稿一向書肆に賣れず、生活に窮し竊盜して處刑せられたり

△中西梅花道人は明治に於ける初代の新體詩人なり、彼亦狂を發して路傍に餓死しぬ、彼は其の最期に於て一椀の飯すら得る能はざりしなり

若し夫れ富貴も淫する能はず、威武も屈する能はずと、權力階級に對して傲岸自ら高しとする時は、彼は遂に文壇の人たる能はず、高靑邱は市に腰斬せられ、トーマスモアーは斷頭臺に梟せられ、シエーバルトは牢獄に投せられしもの之れ皆紳士閥の怒を買ひしが爲めに非ずや、嗚呼今日の社會にありて文學者は壁上の鸚鵡の如く窓間の兎の如く、紳士閥の飼養に甘んぜざるべからざる乎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●話の聞書

◎私室と公室　安部磯雄君の亞米利加みやげの話の一つ。滊船の中の船室は上等と云つても實に狹くるしいもので、三疊位な一室に、上下二段の寢床があつて、二人の船客が入れられる。時としては別に長椅子を一つ置いて、三人の船客が入れられる事もある。然るにダイニング●ルーム（食堂）、ソーシャル●ホール（社交室）ライチング●ルーム（文書室）などになると、其の廣大にして、美麗にして、諸般の設備の行屆けること、實に驚くばかりである。そこで思ふに、船中の如き面積に限ある處では、勢ひ一私人の使用する領分は最小限度まで縮少せられて、公共の使用する領分は成るべく大きく擴張せられる事になる。之を社會全體に應用すれば、即ち社會主義の實行になるのだ。

◎上等客と下等客　是も同じく安部君の話。米國行の滊船へは、上等客は三百六十圓を拂ひ、下等客は六十圓を拂ふが、上等客には飮食物其外諸種の設備に多額の費用が掛かるので、船の方では幾らの利益にもならぬ、船の方で利益を得るのは安んぞ知らん多數の下等客のお蔭である。現に食料に就て聞いて見るに、上等客には實費一弗を要するのに、下等客には僅かに十三錢しか掛からぬとの事。是は汽車などでも同じ有樣で、三倍とか六倍とかの賃錢を拂つて、十倍も二十倍もの待遇を受けて居る。今の世の中は到る處に、上等社會が下等社會の頭を刎ねて、其のお蔭で贅澤をして居るのだ。

◎孟買の綿花と河內の百姓　是は大阪の人の話。河內、攝津の平野は有名なる綿の產地で、百姓は皆な主として綿作をやつて居たが、此の十數年前より孟買の綿花が盛んに輸入せられるので、迚も競爭が出來なくなり、紡績會社の大きな烟突が幾つも幾つも建てられると同時に、其邊の小百姓、中百姓は大がい皆な倒れてしまつた。そして極々小數の大地主が、只の樣な値で其の廣大の土地を兼併してしまつた。世界經濟の大勢は實に恐ろしいものだ。是でもまだ眼が覺めずに、勤儉貯蓄で身が立ち家が立ち、誰も〳〵大金持になれるかと、夢を見て居る連中があるから可笑しい。

◎三井の勢力　滿洲から戻つて來た或る小さな仕事師の話に。イヤもう三井の跋扈と云つたら御話にならない。實は僕等も社會主義が唱へたい位なものだ。そりや軍隊の受負とか何とか云ふ樣な、大資本家は大資本家らしい事業ばかりヤルのなら、何も我々が苦情を言ふべき筋でも無し、言つた所で追付く譯でも無し、さうすれば我々は又我々で、其の御大家の蔭に隱れて、少しづゝの落穗でも拾つて行くと云ふ譯だが、何しろ三井ともあらう者が、アノ勢ひで以て蒟蒻屋まで開かうと云ふのだから堪らない。それでは我々小さい者の立つ瀨が無いではありませぬか。大資本の橫暴は實に極まれりと謂ふべしですと、大變な憤慨であつた。それ相應な不平で實に面白く聞かれたが、そこまで來ながら未だ小泥棒根性が棄てられぬとは、扨々氣の毒なものなり。

運動基金募集

金五圓	銀座	佐々木十九氏
金四十七錢		無名氏
金五十錢		釘本牛狂氏
金五十錢	常陸	齋藤安平氏
金三十錢	熊本	植田清之助氏
金四十五錢	神奈川	石塚幸太郎氏

小計金七圓二十二錢

●『良人の自白』（中篇）批評會

（中川生）

▲去八日開催された火曜會の談話會では『良人の自白』の中篇を縱橫に批評した、今其の重なる點を紹介して見よう。

▲著者は其主義の立脚點より、現代の家族制度を批評せんとして此作に筆を染めた。中篇は無愛情の結婚より來れる社會の罪惡を忌憚なく描寫したものである。之は今取り立て、云はずとも著者が明かに標榜して居る處である。著者は此主張を表白せん爲に筆を執ッた、則ち『良人の自白』は傾向小說である、サア傾向小說！之が大問題だ。けれども篇中に現はれ來る白井俊三でも、深志屋の御登喜でも、彼等の苦悶と煩惱の跡が如何に深い〳〵人生の問題に觸れて居るか、俊三が自己の薄志弱行を充分意識しつゝも、『意氣地なし〳〵』と叫びつゝもヂリ〳〵と罪惡の谷に落ちて行く其心的徑路に於て、如何に深い人生の永遠的の問題に觸れて居るか、『良人の自白』は決して著者が表面に標榜する、組織とか制度とかいふ樣な點に就ての單純な『有主張小說』ではない、今日の純文學者と稱するものが稍ともすると純文學の立脚點から這般の小說を卑視して文壇の異端とする。けれども普遍的の同情とか、沒理想主義とか、立派な事を口にする人が、大々的感情家で、情熱の念が火の樣に燃えて、常に御殿女中的の嫉妬や猜疑の衝突から、馬鹿げた喧嘩をして居るのを見ると、吾人は著者と共に喜んで文壇の異端といふ名譽を頂戴したいと思ふといふ人もあッた。

▲私は『良人の自白』の俊三やお登喜が自己の自由を重んじて、大膽に自己意識の指揮の下にあらゆる社會の死灰の樣な、道德や秩序や制裁を打破したのを見て、快哉を呼ばざるを得ないと絕叫した、極端な個人主義者もあッた。

▲著者は極めて叙景の筆に拙である、單に櫻とか月とかを極めて普通なあり來りのまゝに叙して、其景色をアリ〳〵と眼の前に寫象する事が出來ないのは、殘念である、赤表紙や黃表紙から離れて少し研究がして欲しいと痛快な批評を試みた人もあッた。母親の通夜の處で死人の上の白衣がムク〳〵と動いた樣な感がした等といふ叙事は極めて印象的だなぞといふ人もあッた。

▲源地義の別莊でお登喜が村の人の俗謠を聞く處、春曾禪師の噂を立聞きする處、古臭くッていかぬといふ批難もあッた、お登喜の自害を下女が發見する處、舊俳式だなど、冷嘲する人もあッた、けれども前篇のクロムエル等に比ぶれば少しは調和して居るといふ人もあッた。

▲某侯とか、何々院とか、甲野とか、乙田とか、あゝいふ事を決して小說の中に使ふものでない、アレは讀者の空想の連續を破るもので、人の美感を傷くる事が非常なものだといふ劇しい批難もあッた。

▲お登喜が非常にほめた人も居た『丸髷――姉さんだの』のあたりが自然だといふ人も居た。『此の世限りの時間に會ひたい、――世間をニッコリ嘲ッて死にたい』の會話を絕妙だとほめた人も居た。お登喜さんは四十近い年增だから姉さん振るのは好いけれど、時々十七八の娘らしい諧謔い語が出て來るのはと、憎らしく云ッてのけた少年も居た。

▲會話文で永々しい獨語を云はせるよりも、叙事文で心の說明した方が好からうといふ人も居た。

▲お玉が俊三の傷しい心をよく憐ひながら、常に恐れて遠ざかる樣にして居る處、著者の用意實に行き屆いて居るといふ人も居た、お登喜が早く死んだのは實に意外であッたといふ人もあッた。

▲それから實感論が出て、俊三の嫉みたらしい男であることを罵倒し、松野を濫情者だとか、意氣地、だなどゝいふ人も見えたけれども、俊三の行爲の大矛盾が現代靑年の自白だなんていふ人も見えた、しかし實感論は、批評として無意義であるのでやめにして、茶菓の間に、其夜傍聽に來た著者と、實に趣味の多い談の花が咲いたが、それは茲に書くまい、當夜の批評はマアざッと恁んなものであッた。

●新刊紹介

▲妙な男（菊池幽芳著）　すばらしき評判なりし己が罪が案外くだらぬ駄小說なりしに失望せし我れは、復この妙な男に貴重なる時間を空費せしことを後悔しぬ、著者卷頭に叫んで曰く、『要は只多數の新聞讀者に無害の娛樂を與へて、新聞紙に對する愛着心を盛ならしめんとするにあるのみ、無主張無理想の小說』と、著者眞に已を知るものか、讀んで益なく　讀まずして損なし、決してくだる小說に非ず（潤）（東京市神田區西小川町二番地金尾文淵堂發行定價六十錢）

△花衣（一六八）　牛込市谷田町文友社
△時代思潮（十八）　本鄉森川町其社
△國民評論（五）　神田三崎町三の一其社
△七人（八）　小石川宮下町同發行所
△學燈（九の六）　日本區通三丁目丸善
△家庭週報（廿七）　小石川目白櫻楓會
△婦女新聞（二七〇）　牛込東五軒町其社
△經濟新聞（三六）　日本橋蠣殼町其社
△日本人（四一四）　神田雉子町政教社
△基督教世界（一一四〇）　大阪北區中之島其社
△明義（六の六）　麴町紀尾井町其社
△政界時事（五八）　麴町上二番町其社
△愛國婦人（八二）　麴町區牛ヶ淵公園同發行所
△好學雜誌（廿五）　麴町區三番町好學會
△法律新聞（二八九）　日本橋本銀町其社

●下谷區萬年町 貧民窟狀態（三）

齋藤兼次郎

△第四貧民の收入　人が貧民たるか否かを決する條件は其の收入の多いか少いかに在る、而して何故に彼等の收入が少いかといふ事が分れば、何故に現在の經濟組織が惡いかといふ事も分かるのである、ソコで又た吾人平生の主張たる社會主義がドウして起つたかといふ事も明瞭になる譯だ。

△さて彼等の收入を調査するには、勢ひ其職業を知るの必要がある、換言すれば彼等の收入の狀を調べるのは一面より見れば即ち職業の調査となるのである。

△彼等の職業中、收入の一番多いのは土木人夫で、日の收入が通常二十錢、其業務は多く東京市の道路普請又はドブ浚ひである、其事業に飽きて二三年以上を經過すれば市役所土木課の定傭人夫となり、日給も昇給して四十錢となり、猶ほ一年を經る時は五十錢となるが常例として居る、併し五十錢以上に昇るのは算筆が出來るとか製圖が出來るとかいふ樣なものに限ら[illegible]る、要するに三十錢といふのが普通である。

[illegible]車夫、此の頃の車夫が電車のために其職を奪はれ、非常の困難に陷りて居る事は世人の既に知る所である、殊に貧民窟の車夫は一般人の想像し得られぬ程悲慘なる境遇にあるのだ、車は汚く、衣類は穢く、白晝は營業も出來かぬれば、夜分ばかり、夜さに出で、白晝稼いでさへ非常に困難なる所を、夜分ばかりでは收入は少なし、殊に彼等の多くは老人や病身者にて、女房のダンゴの串刺りの賃金を加へて漸く二十錢か二十五錢の收入、其內車の『八代』（借賃）を三四錢も拂へば二十錢足らずとなる、其れで親子三四人活計を立てねばならぬといふに至つては彼等が窮困の程、想像するだに悲慘である、されば若しまぎれに、惡いとは知りながら無理に通行人に强請をする、運惡く巡査に見付られば此に進退谷まる、科料を出せと言はれても持合が無い、警察も已む無く期日を定めて納付を命ずる、然かし元來貧困に迫れる彼等の事故、其期日になつても決して納めない、ソコで最後は科料の代りに拘留の[illegible]となるのだ、サア其後は大騷ぎ、先づ長家中の相談になり、長家中の有る丈けの物を集めて質屋に運び、漸く五十錢を調達して警察に驅け付け、辛うじて一人の同胞を救ひ出す、何と憐れな話ではないか。

△下駄直し、斯の職業は下谷の貧民窟には餘り澤山無い、斯の業も昔と違ひ職流行の今日の事とて其收入は極めて僅少で、其上雨天の時は稼ぎが出來ぬ、漸く晴天の日を待つて市中に出で、得る所は僅か二十錢か二十五錢、其上に此の職業は鑑札の檢査が六かしく、一年には二三回も警察署に出頭して認許を受けねばならず、それを怠ると科料に處せらるゝか、又は鑑札を取り上げられるといふ事になる。

△紙屑拾ひ、斯の業は下谷の貧民窟で最も多數を占めて居る、一貧民語て曰く、紙屑拾ひといふ仕事があるので新造の者は餘程助かります、老人などが之に依て[illegible]死を免れて居るかも知れません、投身、縊首などすべき人々が、露の命とはいへ、兎もかくも之が爲に活き延びて居るのである。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同志の運動

▲九州傳道行商日記(十三)

(小倉市より) 小田頼造

▲六月二十五日、晴、朝、小川、水之江二君と橋本の町端にて別れ、午後三時過中津の宿屋に着いた。▲二十六日、曇、朝僕と耶馬溪觀光同道の爲め橋本鶴から態々來られた松尾卯太郎君を停車場に迎へ、後市中を行商し、二時頃同地の長谷川義雄、牧師柳原直人、辯護士堀内松十郎、岩田[illegible]等の諸君を訪ふた。某君曰く「社會主義は昔しの仁政と政治に外ならぬので、唯異る所は前者は被治者の方より權利として要求し、後者は治者の方より之を施すの差のみ」と。聞けば此の地は頗る[illegible]者は自身の地だけ資利主義時貸主義が盛んで、町民で高尚なとか理想的なとかに耳を傾ける者少く、別莊道路と[illegible]とが[illegible]の目的であるとか。此れは翁の獨立自尊主義(公園にある翁の紀念碑には「獨立自尊」と大書してある)が偏路に走つて[illegible]なる利己主義に變化した譯ではあるまいか。夜松尾君に奢られて宿で鷄肉を喰ふた。▲二十七日、雨、朝來起き出で見れば細雨[illegible]として降つて居る。けれど雨中の耶馬溪も亦別の[illegible]あらんと二人で協議して出たのは六時半頃。三里許り行くと耶馬溪の取附きで、此れから十餘里に渉る山國川の溪谷が所謂耶馬溪なのだ。河床に堆積する磊々たる小石、巨岩、大石に當りて[illegible]音をなす溪水、[illegible]突兀たる山嶺は低く高く相連なりて屹立し、而して其の周圍頂上に[illegible]松樹[illegible]の茂生せる[illegible]緑樹の美しさ[illegible]、絶壁を穿てる大洞門、頭上に高く突出せる[illegible]にても天然の力の偉大に亦奇しさかな。予等は左顧右眄[illegible]として眼を[illegible]じ、充分に此天然の大景を賞翫するの遑がなかつた。案内人を傭ふて[illegible]の[illegible]跡を[illegible]、森林を過ぎ[illegible]を攀ぢ登り天然の石橋を渡りなどして、とう[illegible]耶馬溪[illegible]一の絶景と稱せらる、羅漢寺に着いた。成程此等からの眺望は絶美だ。眼前に展開された山川村落の[illegible]は小いけれど[illegible]景色の美しいといったら僕等の拙い筆で迚も描寫するとが出來ないから、僕は[illegible]五百羅漢、[illegible]地獄は[illegible]の傍で、小野小町[illegible]男女が、地獄[illegible]なく[illegible]あるこの小[illegible]は[illegible]なる現社會に於ける戀愛の[illegible]ではないか。此寺の開山[illegible]で七十[illegible]の高齢で、三週間餘り地下に[illegible]して[illegible]しつゝ死んだとのこと。僕等は[illegible]なのに驚く。羅漢寺を下りて一[illegible]耶馬溪を上つて口の林まで行つて見たけれど、景色が大分平凡になり、此れから先きも同樣だとのことに歸途に就き、疲れた足を運んで九時頃中津に着き、此夜は松尾君に奢られて久し振りに稍々高等な宿屋に泊つた。[illegible]ないから解らないが、耶馬溪の景色は[illegible]から羅漢寺までの一里の間に[illegible]つて居るやうだ。中津から來た[illegible]君は僕等に尾行し[illegible]したから[illegible]足が疲れただらう、[illegible]の至りだ。▲二十八日、晴。朝松尾君と別れて中津を出發。自[illegible]には注意を怠らない僕にも、[illegible]て平民社を[illegible]ふ[illegible]が何所からか襲ふて來て數箭から腹痛の氣味、午後はとう[illegible]下痢、發熱。殊に熱い日中車を引いて進んだものだから疲勞と苦痛は甚しかつた。行橋までと思つて居たのに迚も行けないので、椎田の木賃宿に車を預け、松尾君と約あれば汽車に乘つて行橋に行き、停車場で同君と再會し、同地の宿屋に泊つた。椎田の木賃宿で客が何かといふから主義を說いたら大に喜んで、『貧乏人の爲めにする勞苦は決して無駄にはなりません』と僕の行商を感謝して吳れた。入門と富の壓制を一冊づゝ寄贈したら同宿の人々に讀んで聞かせると謂ふて居た。[illegible]此邊には[illegible]が流行してるから注意せよとの事。[illegible]といつたら[illegible]を引いて念願を[illegible]所の比ではない。苦しい中にも松尾君が親切に看護して下さつたので僕はどれ程嬉しく頼有かつたか知れない。病氣が同志の居ない薩摩や日向の山中で起らず、こんな時こんな所で起つたのは不幸中の幸である、[illegible]松尾君の温情好意を深謝する。▲二十九日、雨、今日は熱も大分減退し、下痢も止んだけれど、急激な[illegible]的變化の起つた[illegible]から身體の疲勞は中々止まないので、[illegible]て居た。松尾君は[illegible]の車の[illegible]に椎田に行き、引續き[illegible]の勞苦を見て下さつた。夕方汽車で小倉に行き、身體の疲勞も大に減つたから松尾、横田[illegible]、約子[illegible]等の三君に伴はれて[illegible]の講演を聞くとが出來なかつたのは遺憾であつた。[illegible]の一時頃、[illegible]。▲三十日、雨、朝、松尾、横田、[illegible]三君來談。午後共に[illegible]分に僕に[illegible]行くのだから[illegible]、[illegible]の宅を[illegible]。[illegible]に[illegible]を[illegible]し、[illegible]君の宮宅を去つて[illegible]と二人で雨の中を市中に宿屋を探し、[illegible]人宿に落着いた。▲七月一日、雨、[illegible]、[illegible]分[illegible]しないやうだから朝[illegible]に診察して貰つたら、もう心配する[illegible]はないとのこと。見れば僕には三人の[illegible]も尾行してる[illegible]の一人は憲兵だ。[illegible]横田、約子二君來談。▲此の一[illegible]日に於て三十七册の社會主義的書類を賣つた。(終)

▲九州傳道行商日記(十四)

(下關市より) 小田頼造

▲七月二日、晴、朝、横田、約子二君と汽車で門司に行き、吉野君一君と訪ね、後松尾枯泉君も來會されたので、四人鼎を圍んで愉快な會食をやり、放談高論時の過ぐるを知らなかつた。夜は吉野、横田二君と三人が枕を並べて眠つた。今日は實に近來にない愉快な日であつた。▲三日、晴後曇 病氣が全快に迎いたので、行商を始めることにし、正午吉野横田二君と汽車で小倉に歸り、宿屋から荷物を受取つて再び汽車に搭じ、椎田の木賃宿から車を引いて出たのは四時過頃であつた。椎田で六十五歲のお爺さんが魚の行商してるに逢ふた夕方行橋に着き宿屋に車を預けて汽車で堺君の郷里豐津に行き、全地の宿屋に泊つた。▲四日、曇、朝、堺君の令姉本吉見子氏を訪ひ、後堺君出身の豐津中學校に行商して、同君の恩師緒方道太郎氏に面し、堺君が大なる感化を受けしといふ志士で亦精神家たりし志津野氏の墓所先生の事など聞いた。同校を去て、荷物を提げて惡るい田舍の山道を一里餘り歩き、下城井村に堺君の知人なる代議士征矢野半彌氏を訪ふて生憎不在の爲め會はず、椎田から汽車で行橋に歸り、島田與介氏等を訪ふた、島田氏は老牧師ながら今後社會主義を研究すべしと謂はれた。夜は車を預けた宿屋に泊つた。病後の身故荷を提げて今日步いた二里の田舍道は僕に取つて甚だ苦しかつたのである。▲五日、曇後雨 朝出發。田草採る田舍乙女の謠ふ平民的俚歌は深窓の佳人が琴に合せて謠ふ靡弱なる淫歌に比してどんなに美しいか知れない。途中三十四五歲のオールド、メイド若嬢が洋服姿で賣藥行商をしてるのを見た。服裝は美だが此婦人が此所に至れる境遇に想到すれば眞に涙の種だ。今の社會組織を以てしては將來こんな婦人が續出するとならん。嗚呼此れ實に大なる問題ではないか。露岳村からは行商を止め、三ヶ月前に通つた道を過ぎ、雨の降ろ中を關門海峽を渡り、午後六時過ヤツト下の關なる山口君の郷宅に着き、九州傳道行商最後の旅裝を解いた。顧みれば行商を終へて歸つた時の愉快といつたら無い。▲四日間 に於て社會主義書類十一册を賣つた。

○ ○ ○ ○

▲此行日を費すと九十四日、談話會を開くと六回、社會主義的書類一千弐百六十六册を賣つた。一般に本土よりも文化が遅れて居るといふ九州で意外によく本が賣れたのは主として天下の趨勢が愈々社會主義に趨ひつゝありし、九州の僻陬にも此思潮が流れくて民心の覺醒を促しつゝあるのと、一昨夏の、片山西川兩君等の遊說の影響と、同志諸君の御盡力の結果であらうかと思ふ。此行中僕に種々の便宜と保護とを與へられたる沿道各地の同志諸君に向つて僕は玆に謹んで深厚なる謝意を表する。例に依て九州傳道行商中賣れた本を分類して見ると即ち左の通りだ

▲神井知至著社會主義百四十一册▲富の壓制百二十七册▲平民社編入門(?)百十册▲片山潛著我社會主義八十八册▲社會主義入門八十五册▲火の柱七十六册▲平民社譯トルストイの日露戰爭論七十一册▲土地國有論六十一册▲良人の自白前編五十九册▲ラサール四十九册▲革命婦人四十册▲消費組合の話三十六册▲ジヨン・バーンス三十五册▲カール・マルクス三十一册▲合計一千二百六十六册

▲早稻田社會學會

大學部中學校實業學校を通結し遂に氣脈を通じたる早稻田社會學會は今度夏期休暇中の研究課題として「戰爭の影響が如何なる方法に依りて那邊に及べるか」といふ實地問題を各會員に提供したりと云ふ、秋には面白き好材料を得るならん

▲函館平民倶樂部(第十一次小集)

七月七日午後八時、相生町四十七番地森崎氏方に於て開會、出席者六名、社會主義の歌を合唱し、一二の感話あり、例の如く雜談の末、十時散會したり、次回は七月二十一日(第三金曜)午後六時より同所に開會の答

●社會主義茶話會

●今十六日午後六時半より、神田三崎町三丁目一番地、吉田屋に開く
會費金十錢持參の事
△此の茶話會は、主義傳道を目的とするもの故、同志諸君は觀誘なり友人なりを一人にても多く御誘引あらんとを乞ふ

●編輯雜事

▲「血染の赤旗」といふ前號の唱歌は、『四百餘州』の調で歌ふと大變に面白いので、平民社などでも大分はやつて居ますが、第三節の『見よや血染の赤旗』といふ所がチト歌ひにくい樣です。作者からは『あればアカハタと讀むよりセキキと讀む方が善い』と申越されましたが、平民社では『いつそ單にハタと讀んで、長く引延ばして歌つた方が善くは無いか』と云ふ說もあります。別に『旗を』として は ドウだといふ說もあります諸君の御研究を乞ふ。猶は第七節の第一句の『智慧』の下に『は』の字を脫して居りました。

▲幸德君出獄歡迎號 本紙第廿六號は本月三十日發行の筈なれども、それを二日だけ繰上げて廿八日に發行し、幸德君出獄歡迎號にしたいと思ひます。若き投書を望む。

▲堺氏の短篇小說 は廣告ばかりで一向に正體を見せませぬが、敢て勿體ぶる譯でも何でもなく、幾度書きかけて見てもドーモ筆が進まないのださうですから、何卒諸君の御寬恕を願ひます。彼にして老いたらば知らず、若し誠は一片の火の彼れの心中に燃ゆるあらば、他日必ず筆を此の方面に立つるの時があらうと思はれます。

▲社會滑稽書 小川芋錢君に乞いて貴社より社會畫葉書を發行しては如何、盖し希望者甚だ多かるべしと信ず S S 生

●木下尚江君小說

小說 良人の自白

中篇 七月二日初版發行直ちに賣切れ更に再版發行せり
上篇は久しく品切の處、この度第四版發行せり
下編 目下每日新聞に連載中、秋風吹き至るの比出版するを得べし
(定價、各冊三十五錢、郵税不要)

火の柱

第八版を發行し『良人の自白』と共に猶は文壇を橫行す▲價同

發行所 東京市麹町區有樂町 平民社
取次所 大阪市中の島田簑橋南詰 平民社

平民文庫出版廣告 (郵税不要)

●社會主義入門 平民社同人編 定價十錢
●消費組合の話 石川旭山著 定價十二錢
●地理上の瑞西 安部磯雄著 定價十五錢
●社會民主黨建設者ラサール 幸德秋水著 定價十五錢
●土地國有論 西川光次郎著 定價十錢
●富の壓制 西川光次郎著 定價[illegible]
●經濟進化論 田添鐵二著 定價十五錢
●小說 火の柱 木下尚江著 定價廿五錢
●小說 良人の自白(上篇) 木下尚江著 定價廿五錢
●小說 良人の自白(中篇) 木下尚江著 定價廿五錢
●革命婦人 平民社同人編 定價十二錢
●社會主義と婦人 山口孤劍著 定價二十錢

五錢本之部 (一部價五錢郵税一錢 但二部以上郵税不要)

●百年後の新社會 堺枯川抄譯
●理想鄉 堺枯川抄譯
●ジヨン・バーンス 西川光次郎著

書籍取次販賣 (郵税無料)

●社會問題解釋法 安部磯雄著 價一圓廿錢
●廿世紀之怪物帝國主義 幸德秋水著 價廿五錢
●社會主義神髓 幸德秋水著 品切中
●小說勞働問題 [illegible] 價卅五錢
●社會主義概評 島田三郎著 價三十錢
●社會黨 西川光次郎著 價十五錢
●產業組合手引 [illegible] 價二十錢
●青年と生存競爭 [illegible] 價二十錢
●家庭の新風味 堺利彦著 價壹圓
●家庭夜話 同上 價壹圓
●枯川隨筆 同上 價二十錢
●トルストイ翁日露戰爭論 平民社譯 價八錢
●小品千題智識と趣味 [illegible] 價三十五錢

注文所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
注文所 大阪市中之島宗是町田簑橋南詰 大阪平民社

●平民社より

（利彦）

▲安部磯雄君より「枯川」といふ號を廢せられたるは近來の快事だ、木下、片山の二君と小生とは曾て號といふものを有たなかつたから吾等の口から號を廢せよとは少し言ひ惡くかつたが今度君が率先せられたからドーカ我同志の人々にはこれに倣つて貰いたいものだ。我等は匿名の下に人を攻撃する樣な卑劣な考はないから天下何處に行つても親の附けて呉れた名が一つあれば充分だ、ドーカ直言紙上にもアノイヤナ雅號とかいふものを止めて皆本名を現はしてもらいたい、又先生といふ事も教師と生徒との關位に制限して我同志の間では全廢したいものだ「先生と呼ばるゝ程の馬鹿でなし」といふ事もある位で此頃は大分濫用せらるゝやうだ」といふ葉書が來ました。

▲然しながら小生も亦た、或場合に於て、或趣味の爲に、或種の匿名、變名を用ゐる事はするかも知れませぬ。それから總ての署名を一々「堺利彦」とするのも餘り煩はしいと思ひます。「外交時報」に有賀氏が「長雄」と署名したのを、床しく見た事もあります。「大阪朝日新聞」の論文に「彦」といふ署名を見た事もあります。そこで小生もそれらに倣ひ、場合に應じて、或は「利彦」と署し、或は單に「彦」と署する事に致します。

▲前號の發行當日、ツイ近處の土居香海氏が「利彦」と彫つた鮫の角の印を一個持つて來て呉れた。氏は去年僕の爲に、竹印に「枯川」の二字を彫つて呉れたが、今度の事で其の竹印が不用になつたであらうからとて、それで更に「利彦」の印を拵へて呉れたのである。氏は彫刻と謠曲とに遊ぶ風流の人である。

▲去八日、予は延岡爲子氏と二人で巣鴨に面會に行つた。丁度板倉中氏夫婦も子供を連れて行つて居たので先づ五人一しよに幸徳君の病室に導かれた。何しろ婦人がふたり（殊に板倉夫人は洋服）で、子供まで一緒の大勢の面會であるので、頗る監獄内の人目を引いた樣であつたが、他の四人に婦人の姿を見せてはならぬと、病監の窓の戸を皆んな閉ぢてしまつたのは、此の暑いのに、實に氣の毒千萬であつた。

▲幸徳君は存外健康の樣子で、痩せては居るが頗る元氣に話をした。何しろモウ跡が少しだから譯は無い。「君が出て來たら無理にも暫く病院に入れて、緩く養生をして貰はうと思つて居るのだ」と僕が云ふと、「ウンそれも善いが、何か少しづゝは書く事の出來る樣にしなくちやア」と彼は答へた。それで僕は「監獄ぢやアあるまいし」と思ひながら、「病院に居たつて書く事は自由ぢや無いか」と云つて笑つた事だが、兎に角彼れは五ヶ月の蘊蓄を發揮せんと欲して、既に腕の鳴るを覺えて居るのであらう。彼は又、一二ヶ月養生の上は更に十分の健康を得んが爲に、どうかして暫くアメリカにでも遊んで見ようかとも云つて居た。

▲跡で延岡さんと予と二人、西川君に面會した。彼は相變らずニコ〳〵して非常の元氣だ。「ナニ僕もモウ八十日ばかりだ」と事もなげに云つて居た。

▲荒畑勝三君は去十日例の赤車を引きながら本社を出發して、再び東北地方傳道行商の途に上つた。

ライオンはみがき　赤鑵入

体裁優美にして能く香氣を保ち頗る携帯に便也

山口孤劍著　社會主義と婦人　（本月十五日發行）

定價二十錢　郵税不要

紛々たる哉婦人問題の解決や、道徳は只彼女に義務を行ふを強い、宗教は偏に彼女に苦痛を忍ぶを誨ゆ、此間にありて最も明白に最も正直に解釋を與ふるもの獨り我が社會主義あるのみ、社會主義は五千年間凌虐せられたる婦人の愛をして光明の御空に凱旋するを約束するもの也嗟寂寞を糧として恐れと死の谷をさまよひ壓制の笞に泣き虐待の覊に呻ぶ婦人よ何ぞ來つて此の博愛を經とし自由を緯とせる民生の大眞理にして世界の大宗敎たる我が社會主義の福音を聽かざる

發行所　東京市麹町區有樂町三ノ一　平民社

賣捌　東京堂、上田屋、東海堂、其他各書店

辯護士　花井卓藏　東京市神田區錦町一丁目二番地　電話本局八八三番

金鵄ミルク　世界第貳等

東京市大傳馬町一丁目　逸見山陽堂　電（浪花）三二五

薄田泣菫新作　近來絶無の新美本　白玉姫

滿谷國四郎書　木版繪畫五葉　書絹極彩色合表裝　金八十錢郵税八錢

「白玉姫」は泣菫氏の最新詩文集也詩は調を民謠の精髓に採りて今の所謂言文一致の新體を詩歌の域に試しもの氏が從來の詩體と全く趣を異にして而もまた清新の詩味溢るゝ如きを覺えずんばあらず散文は日記あり隨筆あり消息あり詩歌を論じ戀愛を語り或は宗敎の玄境に參じ或は自然の清興に會心し來りて雅致饒かに眞個無韻の詩といふの過言にあらざるを知らん

發兌元　東京神田區西今川町二　金尾文淵堂

發賣元東京堂上田屋前川文榮閣東海堂▲大阪杉本書店▲九州菊竹書店等

辯護士　今村力三郎　東京市神田區今川小路二丁目十四番地　電話本局一九四〇番

活版印刷　東京築地　株式會社　國光社　電話新橋二六九三番　特電話八八番

白馬會編輯　光風　第貳號　七月一日發行　定價卅五錢郵税四錢

『水彩畫木版三圖』銚子寫生の内。黒田清輝○夕空。和田英作○若葉。長原孝太郎『寫眞四圖』ムードン寫生の内。岡田三郎助○藤の花。藤島武二○雨。三宅克己○ウオルヘルム一世。メンツエル◎清水（石版）中澤弘光◎肖像（四色木版）黒田清輝『寫眞版五圖』メンツエル像（久米桂一郎）母子（小林萬吾）島津齊彬公。カツフエの一卓（黒田清輝）◆伯林の老書家メンツエル（久米桂一郎）才情の話（茅原孝太郎）脚本青春譜（花島房一）島津齊彬と玻璃製造（黒田清輝）吾々の十年前（小林四絃）繪畫の趣味（中村勝治郎）夢の話（三宅克己）瀧の白糸（瀧園社）水村山廓（白人會）旅の歌（中澤弘光）雜談集（小林鐘吉）伊太利紀行（久米桂一郎）夏草（坂井犀水）

東京本郷區元町一の十六　光風發行所

月刊雜誌　家庭

▲七月五日發行▲定價一部六錢年七十二錢

本月發行の分には全國小學校教員の妻君に是非讀んで貰ひたき井上博士の談話及び舟橋水哉氏の悶えに苦しむ人々の慰藉の文を載す其他内容豐富見本は郵劵代用若からす

發行所　東京巣鴨二二五五　家庭社

辯護士　卜部喜三郎　東京市麹町區上六番町二番地　電話番町六二六番

●神經衰弱　遺精早漏陰萎勃起力記臆力衰退手淫の害　速治療法

●陰莖包皮無痛

●梅毒●りん病●痔疾

●婦人科●せうかち●子宮病●血の道●月經不順

●地方患者は返信料添へ申込む可し

東京市神田區西今川町三番地　愛生醫院

思想界革命兒　無我の愛　月二回雜誌

▲第三號（一號二號悉皆賣切）

▲絶對的眞理▲淺薄なる時代思潮▲國家の煩悶▲無我の基督▲全國卒業生諸君を迎ふ▲吁兩本願寺▲無我苑生活▲予が人生觀▲呪本山歌▲見本往復葉書▲一部二錢

發行所　東京巣鴨　無我苑

辯護士　板倉中　神田區新石町五番地　電話本局四五四番

觀世流のうたひ教授

麹町區有樂町一丁目五番地　毎日午前午後　束脩金壹圓　月謝壹圓五拾錢　土居香海

外科皮膚病梅毒外科的婦人科疾患泌尿器械的療法

診察　午前九時より十二時まで

東京　新橋際出雲橋　加藤病院　電話新橋一〇二

院長　獨國醫學士　加藤時次郎

分院　橫濱神奈川臺火木土自午後三時至六時　小田原海岸毎月曜午前中

麻病根治　快麻丸

本劑は一等軍醫正淳刈先生の處方に據り藥劑師田所繁松調製せし者にて輕きは一週間如何なる難症にても一ヶ月にて根治せしむる特効保證の神劑なり

價　三日分十五錢　七日分三十錢　十五日分六十錢　一月分一圓

東京市中は即刻配達す●全國送料逮錢す

發賣　神田區旅籠町一番地　一志堂藥局　電話本局三千四十番

▲本紙定價　一部三錢五厘、廿部前金六十五錢　五十部前金一圓六十錢、郵税不要
▲廣告料　一行十九字詰三十錢
▲注文　は總べて前金に限る
▲郵劵代用　にて御送金の場合は必ず一割増として成るべく五厘の切手を用ひられたし

發行兼編輯人　原眞一郎
印刷人　山田金市郎
發行所　東京府荏原郡入新井村字新井宿二三五七番地　直行社
發賣所　東京市麹町區有樂町三丁目　平民社　電話（本）三三六二
印刷所　東京築地二丁目二十一番地　株式會社國光社　電話新橋特八八、新橋二六九三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY